

新・農業経営者ルポ／第193回

朝日は昇り、花を咲かせる

朝日は昇り、花を咲かせる

佐賀県神埼郡吉野ヶ里町にある7ヘクタールの田畑で200種類以上の野菜やコメを作る吉野ヶ里あいちゃん農園。収穫物は飲食店と個人に販売する一方、県内で運営するレストラン2店舗で料理にして振る舞う。代表の森田浩文（47）はかつて金融業界の第一線で活躍した人物。11年前にすべてを投げ打って帰郷し、なぜ農業の経営を始めたのか。

文／窪田新之助、写真／㈱吉野ヶ里あいちゃん農園

時期が悪かった。7月中旬、テレビやネットでのニュースで、九州は熊本を中心に大雨による被害が拡大している様子が伝えられていた。心配になって直前に森田に電話すると、「うちは大丈夫」という返事だったので、予定通り訪ねることにした。

農園は吉野ヶ里遺跡がある吉野ヶ里公園から背振山南麓を少し上ったところにある。今回待ち合わせたのは、そこからさらに上がっていった峠にある道の駅。佐賀平野を一望できる場所だ。ただ、2週間前から降り続く雨がこの日も降ったり止んだりする天気のせいで、眼下の佐賀平野はけぶっていて様子がはっきりしない。

休業日で人影がない道の駅の入口で森田の携帯電話にかけると、建物の向こうの陰から黒色のスーツ姿に身を包んだ大柄な男がひょっこり姿を現した。身長は180センチメートルを超えているだろう。がっしりとした体つきとは対照的に、柔和で人懐っこそうな表情を浮かべていた。

案内された先は建物のひさしの下のベンチ。ここで取材することになった。

森田を紹介してくれたのは農業技術通信社。あいちゃん農園については2014年4月号の特集「小さな顧客と価値を共有する経営者たち」で詳しく紹介しているので、経営の中身を知りたい方はそちらをぜひ読んでもらいたい。本稿では農業を始めるに至った経緯を追っていく。

経営コンサルタントとして活躍

森田は旧東背振村、現在の吉野ヶ里町の生まれ。地元の小中学校を卒業後、神崎高校普通科を経て福岡大学法学部に入学する。

「大学時代は飲食店をはじめ、たくさんのアルバイトを経験しました。そこで商売のノウハウを身に付けましたね。この経験がその後に活きてくるんです」

大学卒業後は司法書士事務所で働きながら弁護士を目指すものの、26歳で断念。大学時代のアルバイトの経験を活かして経営コンサルタントとして独立した。よほどの才覚があるに違いない。時を置かずして会社を創業し、飲食店の経営や企業買収、不動産投資など事業を拡大していった。

29歳で生死をさまよう

とんとん拍子に事業を拡大していった。それがある日突然崩れる。29歳で脳腫瘍を患ったのだ。

前兆はあった。人と話している最中、会話の内容が飛んだり、以前からの知り合いであっても誰だかわからなくなったりすることがあった。初めは「健忘症かな」と思った。そのうちに歌手の西城秀樹が脳梗塞を患ったことが大きく報道された。病院で自分も同じ病気ではないかと相談すると、「森田さんの年齢でそれはない」とあっさり。様子を見ることになった。

それからしばらくして福岡県最大の祭典がやってきた。800年の歴史がある夏まつり「博多祇園山笠」だ。日本青年会議所に加盟していた縁で森田も参加したところ、一緒にいた知人が驚いた顔で声をかけてきた。「おい、どうしたんだ。顔が紫色になってぱんぱんに腫れてるぞ」。鏡で自分の顔を見ると、たしかに血色を失って腫れあ上がっていた。



㈱吉野ヶ里あいちゃん農園
代表取締役
森田浩文 佐賀県吉野ヶ里町

もりた・ひろふみ　1973年、佐賀県東背振村（現・吉野ヶ里町）生まれ。福岡大学法学部を卒業後、司法書士事務所に就職。28歳で経営コンサルタントとして独立。現在、㈱吉野ヶ里あいちゃん農園を経営する。

翌日、脳外科医を訪ね、X線で身体の断面図を撮影するCT検査をしてもらった。その画像に写っていたのは、左脳にある8センチほどの「台風の渦のような」影。一目でまずい状況にあることはわかった。

医者は脳腫瘍だと告げた。その病名から思い出したのは、80年代半ばに流行った学園ドラマ「スクール☆ウォーズ」に登場した「イソップ」こと奥寺浩。16歳で脳腫瘍にかかって夭折する役柄だった。

病名に続けて医者はこう述べた。

「余命二年です」

ただ、それを知ってもどこか他人事のような感じがしていた。そんな森田に医者は至急入院することを勧めた。脳出血しており、いつ頓死してもおかしくない状態だったからだ。

三途の川からの帰還

森田は医者の忠言に反して入院を1週間後としてもらい、不在にする間の仕事の引き継ぎをするため、職場に戻った。だが、2日目だったか3日目だったかに倒れた。それでも意識はあったようだ。周囲の話によれば、救急車を呼ぶのは断り、自らタクシーに乗って病院にたどり着いたという。ただ、本人は記憶にない。

病院ですぐに手術を受けた森田は、以後数日にわたって意識がはっきりとしなかった。覚えているのは幽体離脱したことと過去の記憶が「走馬灯のように」よみがえったこと。もう一つは三途の川らしき川を渡ったことだ。

その川は自宅の近くを流れる川そのものだった。「かつてはうっそうとした木々が茂った場所にあった」。その川を父親に背負われて渡った。彼岸の地には稲が茂り、なぜかすでに亡くなっていた祖父がぽつりとたたずんでいた。そこで森田は祖父と言葉を交わした。中身までは記憶していない。会話を終えると、再び父に背負われて川を渡り、彼岸に戻ってきた。それからしばらくして目を覚ましたそうだ。

ここで森田が話を中断したので辺りを見渡すと、峠の霧はさっきよりずっと濃くなっていた。

お金の世界に疲れ切った

森田は一命を取り留めた。これをきっかけに「達観したというわけではないですが、自分の人生でこれ以上最悪なことは起き得ない」と覚悟ができたという。

ただ、生活は一変した。一つには後遺症が残って幻覚や癲癇が出るようになったほか、左耳がまったく聞こえなくなり、右耳は聴力を欠いた。


アフリカ茄子


ストライプトガナス（完熟前）


カーボロネロ


ロッサベローナプレコーチェ

あいちゃん農園が作る200種類以上の野菜の一部

朝日は昇り、花を咲かせる

そうした状態が退院するまで半年続いた。久しぶりに職場に復帰すると、「自分の店はガタガタになっていましたね」。それから会社を立て直し、一時は3社14店舗を持つまでになった。

風向きが変わったのは30代半ばに入るころ。経営が傾き始める。身の危険を感じる事態も起きた。ある日、自宅に1枚の写真が送られてきた。そこに写っていたのは妻と乳母車に乗った我が子だった。不動産を巡るトラブルに巻き込まれ、競合相手が裏の世界を使って森田に脅しをかけてきたようだった。

「この写真を見て身を引こうと思いましたね。お金の世界に完全に疲れ切っていました」

農業への誘いは母の味

「お金の世界」からの引退を決めた時点で次の仕事は決めていた。農業だ。その気持ちになったのは母親の味にある。

「あいちゃん農園」の名前の由来になっている母の森田あい子は、早期退職して家庭菜園に勤しんでいた。コメや野菜を栽培。一部の野菜は漬物に加工し、道の駅で販売していた。ある日突然、森田の家にコメや野菜、漬物を送ってきた。

「ハクサイとダイコンをレンジでチンしてポン酢をかけ、ご飯と一緒に食べたんです。そうしたら『ああ、美味いな。コメや野菜ってこんな味がするんだ』って感動しましたね。当時はほとんど外食で済ませていたこともあり、素材が本来持っている美味しさを知らなかったんです。『かあちゃんはこげんうまいコメや野菜作っとったとね。自分でも作ってみたいな』と思ったですよ」

森田はホームページで当時のことを振り返って書いている。「命を与





背振山系にある、あいちゃん農園の畑。200種類以上を作っている。



畑では消費者を対象にした研修会を開催している。

える農業の偉大さを痛感し、農家として再チャレンジ。故郷から授かった自然のパワーに助けられ今を生きています。「朝日は昇り、花を咲かせる。」私が生き抜く事が出来た心の支えです。この言葉を胸に刻み、背振山の麓の棚田、昔ながらの農法で、野菜達を育てています。」

1億円超の取引を作って参入

農業を始めるにあたって、森田がまずもって取りかかったのは販路を固めたことだ。それまでの仕事で外食業界の伝手は少なくなかった。自分がこれから作る野菜やコメを扱ってくれるよう外食チェーンに頼み込んで回った。

森田自身もいくつかのレストランを経営していた。その中には著名な元力士の名前を使った「ちゃんこ屋」チェーンもあった。そこにも営業をかけ、栽培を始める前に売上高で1億円以上の販路を築き上げた。

農地は実家の畑のほか、休耕地をあっせんしてもらった。初年度耕作したのは3ヘクタール。素人ではあったものの、「本やネットに学んで作ってみたら、奇跡的にできたんですよ」。

外食チェーンから個人の飲食店や個人客へ

ただ、すぐに課題に直面した。取引先が求めてきたのは同じ品目の野菜の周年出荷。それなのに森田が耕している農地は吉野ヶ里町にしかなく、自社での生産だけではそれがかなわない。仕方ないので市場から野菜を仕入れて取引先に出荷するという、「いったい何をしているんだかわからない」事態が続いた。

それは望んだ農業ではなかった。やりたかったのは、自分が作った農産物を通じて感動を届けることだ。これ以後、外食チェーンとの取引からだんだんと手を引いていく。

顧客獲得に役立ったブログ

代わって増えていったのは個人客。森田は経営コンサルタント時代からブログに日々の出来事を書いていた。当初は金融業界の人に関心を持たれ、一時は「アメーバブログ」で閲覧数が1位になるほどだったという。農業を始めてからは読者が変わっていった。とくに無農薬や減農薬で栽培するうちに、主婦の読者が増え、野菜の注文が入るようになっていた。

そのうち日本では珍しい野菜の種を購入しては作り、その様子もまたブログで紹介していた。ある日、それを目にした個人店のシェフから問い合わせが入る。見た目が紫キャベツに似たトレビスが欲しいというのだった。さらに、そのシェフは日本では珍しい野菜の名前を挙げ、注文できるかどうか尋ねてきた。作ってはいなかったものの、断ることはせず、種を取り寄せて生産を始める。以後も同じようなことが続き、いつしか取り扱う野菜は200種類以上





あいちゃん農園が販売している野菜のセット。

朝日は昇り、花を咲かせる

になっていた。

農業を始めたときから決めていたことがある。レストランの経営だ。「種をまいてから口に入るところまで提案できるようにするのが一番の広告になると思っとったですよね」

２００種類以上も作っていれば、かなりの数の野菜が余ってくる。それらを活用する商売としてもレストランはいいと思った。現在、佐賀市に「Farmers' Kitchen & Marche」を持ち、野菜ソムリエの資格を持つ妻がシェフとして厨房に立っている。さらに、筆者が今回の取材で訪れたこの道の駅でも3月からレストランを開業した。メニューは佐賀市と同じで、こちらは森田が自ら腕を振るっている。

多品目栽培の理由

ところで、森田が多くの野菜を作るようになったのは次のような理由もある。一つは日銭が入ってくる仕組みを作りたかったから。だから、自社のホームページにショッピングカートを設けた。前職で付き合いのあったＷｅｂサイトの制作会社が格安で作成してくれたのだ。

もう一つはリスク管理。単一作物だと環境の影響を受けやすい。とくに懸念しているのは異常気象だ。

「異常気象が普通になってしまうと、これまで普通に作れていた野菜が作れなくなるなんてことは頻繁に起きる。一つの野菜だけ作っていると、そうした変化に耐えられない。一方で僕は数百種類の野菜を栽培してきて、大手種苗会社の社員と同じくらい野菜に関する知識を持っている。だから、異常気象にさらされても育ち、なおかつ個人店や個人客が求める野菜を提案することができます」

森田は地域の農業を盛り上げたいという気持ちがある。二期目に入った町議会議員になったのもそのためだ。「佐賀県は農業において可能性がめちゃくちゃある県」と感じている。ただ、「田舎なので、誰も新しいことをしない。だから変わらない」とも。ゆえに「自分の存在が刺激になればいいなと思います」と語る。

人生の逆境にあって農業を始めることで生きる力をもらった森田。その農業を通じて今度は故郷に恩返しをしていく。（敬称略）

あいちゃん農園が佐賀市で運営するレストラン。森田が作った野菜を使って、森田の妻が料理の腕をふるう。





